



ピエトロ・ロンギ[1702-1785]

《不謹慎な殿方》

1740年代後半
油彩、カンヴァス
60×50cm

Pietro Longhi [Venezia 1702-Venezia 1785]

The Indiscreet Gentleman

Later 1740's
Oil on canvas
60×50cm
P.1998-4

Provenance:

Palazzo Papadopoli, Venice; Riccio Collection, Florence; with Adrian Ward Jackson, 1977; The Trustees of the British Rail Pension Fund.

Exhibitions:

On loan to the Castle Museum, Norwich 1981-1984; Agnew's Thirty-five Paintings from the Collection of the British Rail Pension Fund, 1984, no.15; On loan to the Fitzwilliam Museum, Cambridge 1985-1996.

Bibliography:

V. Moschini, *Pietro Longhi*, Milano 1956, pp.17-18, fig.4; F. Valcanover, *Pietro Longhi*, "Paragone," 1956, no.73, p.24; R. Pallucchini, *La pittura veneziana del settecento*, Venezia-Roma 1960, p.181, figs.462 & 463; T. Pignatti, *Pietro Longhi*, London 1969 (original Italian ed. Venice 1968), p.75, pl.85; T. Pignatti, *L'opera completa di Pietro Longhi*, Milano 1974, pp.89-90, no.50.

ピエトロ・ロンギこと、本名ピエトロ・ファルカ(Pietro Falca)は1702年ヴェネツィアに生まれた。ピエトロの息子、アレッシンドロが残り

た伝記によると、彼ははじめ、ヴェローナの画家アントニオ・バレストラ(Antonio Balestra, Verona 1666-1740)のもとで画業を学んだ。このバレストラという画家は、17世紀後半の色彩が暗く、硬直化したヴェネツィア絵画に、アカデミズムと古典主義的作風をもち込んだ画家であった。ロンギの個性は必ずしもこのバレストラの作風と相性が良くなかったらしく、ロンギはヴェネツィアを離れ、ローニャのジュゼッペ・マリア・クレスピ(Giuseppe Maria Crespi, Bologna 1665-1747)のもとで勉強を続けた。この、巧みに光と闇を使い分けながら日常生活を鋭く描き出した画家クレスピのもとでの勉強が、ロンギに大きな刺激となった。彼は、再びヴェネツィアに戻り、ヴェネツィアの18世紀という、あまりに刺激的ではない世界での生活の一場面を、つや消しの絵具で刺激の少ないやり方で描き出すという、画期的な手法によって、ものの見事に18世紀ヴェネツィアの生活を我々の眼前に映し出すことに成功している。

《不謹慎な殿方》は、1956年のヴィットリオ・モスキーニのモノグラフの中に、リッチョ・コレクションの作品として、初めて登場す

る。^{註1)} 爾来、多くの研究者によって、その作品の質、および1740年代後半という制作年代は強く支持されている。様式や「恋のさや当て」という主題の扱いからみても、《ご機嫌伺い》(ニューヨーク、メトロポリタン美術館)、《恋文》(同美術館)、あるいは《音楽の手習い》(ボルティモア、ウォルターズ美術館)などの一連の作品と同じ時期とされる。しかし、モスキーニがこの作品と関連づけたヴェネツィア・コッレル美術館所蔵の素描(Museo Correr no.511 recto & verso)との関係は、ピニャッティによって否定されている。^{註2)}

1997年2月17日付のサラ・ウォールデン氏の修復報告によれば、背景上部に古いカンヴァス地の裂けがあり、そこには古いニスを取り除いた後に補彩が施されている。ほかにも細かな補彩の跡や、ダマールニスによる上塗り等が報告されているが、人物像に関わる大きな損傷等は報告されていない。状態は至って良好といえる。

この作品は、薄い緑色の下地に花柄の描かれた18世紀ヴェネツィアの典型的装飾の施された衝立を背景に、若い女性が上着を脱ぎ、下着の裾をたくし上げて丁寧にみているところに、紳士ふたりが興味津々と、そと彼女の仕草をのぞき込んでいる場面である。この女性の姿は、クレスピが得意としていた「虱取り」のポーズからヒントを得ており、モスキーニはそのまま画中の女性は虱を捕っていると解説している。

しかしながら、果たしてこの女性は本当に虱取りをしているのであろうか。少なくとも、背後に見える水盆を手にした女中や、のぞき見をしている紳士の潇洒な服装、さらには女性のスカートの細かで粋な花模様などをみると、決して貧困な生活をしている人物たちではない。女性の脇に置かれたテーブルの上には、当時流行の絹の扇子に香水の瓶がふたつほど見える。

ここに、ロンギのユーモアが隠されている。中央の女性のポーズのみを見るとき、ピアツェツァやロンギ自身の他の作品にも例があるように、そこには明らかに虱取りのイメージがつきまとう。しかしそうした仕草はこの女性にはふさわしくはない。では、この若い女性はなにをしているのだろうか。こうして観者に謎かけをすることで、自然と視線は女性のあらわな胸元に向けられることになる。つまり、観者も、画中の紳士と同じ視線を辿ってしまうのである。そうした行儀の悪さを、女中が、口元にかすかな笑みを浮かべながら、「しょうがないわねえ」と言いたげな表情で、紳士をたしなめる。しかし、たしなめられるのは、画中の紳士ばかりではなく、この作品を見ている人もまた同じなのである。

ロンギは、老若男女、身分の貴賤を問わず、彼が自分の絵の主題として選んだ人々を下品に描き出すことはしなかった。彼はいつも人間に優しい眼差しを向けている。この点において、18世紀ヴェネツィアを代表する劇作家でロンギの友人でもあったカルロ・ゴールドーニやガスパル・ゴッツィ、さらには彼の息子カルロ・ゴッツィといった知識人たちの人間観と軌を一にしている。そうした中で、ガスパル・ゴッツィは、ロンギをティエポロと比較している。^{註3)}

ティエポロが歴史上の偉人たちの集いを描く一方、ロンギは「舞踏会、恋のさや当て、音楽の手習い」を見せてくれる。そして、両者とも、描写において「完璧である」と語っている。こうした、18世紀ヴェネツィア人の感想がある一方で、マイケル・レヴィーは、次のように語っている。「彼の絵は、間違いなく魅力的ではあるのだが、だらけた小さな絵である。まさしく、その時代の社会のごとくに彼の絵はだらけている。彼が見ている世界は、概ね、暇をつぶそうと躍起になっている金持ちの閉ざされた世界なのである」と。^{註4)} 完璧なのか、だらけているのか、いずれにせよ、ロンギの作品は、我々の眼の前に、自然な態度で等身大の18世紀ヴェネツィアの世界を見せてくれる。(高梨光正)

註

- 1) Vincenzo Moschini, *Pietro Longhi*, Milano, 1956, pp.17-18, fig.4.
- 2) Terisio Pignatti, *Pietro Longhi*, London, 1969, p.75.
- 3) Gaspar Gozzi, *La Gazzetta Veneta, a cura di Antonio Zardo*, Firenze, 1957, pp.242-243.
- 4) Michael Levey, *Painting in Eighteenth Century Venice*, 3rd ed., London & New Haven, 1994, p.142.

Pietro Longhi, whose real name was Pietro Falca, was born in Venice in 1702. According to the biography written by Pietro's son, Alessandro, Pietro first studied painting under the Veronese painter Antonio Balestra (Verona, 1666-1740). Balestra was the painter who brought a more classical, academic painting style into late 17th century Venetian painting, then characterized by its dark palette and inflexible forms. Longhi's individuality did not always accord with Balestra's painting style or his character, and it seems that Longhi left Venice to travel to Bologna where he continued his painting studies with Giuseppe Maria Crespi (Bologna, 1665-1747). Longhi was greatly stimulated by these studies under Crespi, a painter known for his adept use of light and shadow in his piercing view of everyday life. Longhi returned to Venice where he succeeded in creating an epoch-making, yet singularly unspectacular, painting style which fully conveys the sheer reality of ordinary 18th century Venetian lives.

The Indiscreet Gentleman first appeared in 1965, in Vittorio Moschini's monograph on the artist where it was listed as a work in the Riccio Collection.¹⁾ Since that initial publication, numerous scholars have firmly supported both the quality of this work, and its dating to the latter half of the 1740s. Stylistically, this painting on the theme of courtship can also be seen as from the same period as a series of other works on the theme of lovers, *The Visitation of the Procuratore* (Metropolitan Museum of Art, New York), *The Letter* (Metropolitan Museum of Art, New York) and *The Lesson of Music* (Walters Art Gallery, Baltimore). While Moschini has linked this work to a drawing now in the Venetian Museo Correr (no.511, recto and verso), Pignatti rejects that connection.²⁾

According to the conservator's report written by Sara Walden on February 17, 1997, there is a tear in the old canvas ground in the upper section of the painting's background, and she removed the old varnish from this area and added some retouched pigments to the area. After making other detailed retouching, she reported covering the work with a top layer of dammar resin, but she reports no major damage in the figural areas of the work. In other words, the work has been maintained in quite good condition.